

周辺からの記憶 20

2015 年むつ・多賀城・宮古

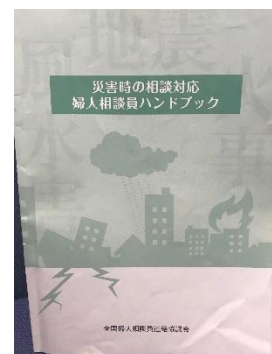
村本邦子（立命館大学）

今年度は「災害と女性」をテーマに、全国を飛び回っている。過去にはあちこちへ講演旅行を楽しんでいた時代もあったが、大学の仕事を中心になると、あまりに忙しいので、ごく例外的な継続研修をのぞいて、すべての講師の仕事をお断りするようになった。

例外的なというのは婦人相談員関連のもの。たまたま 2016 年、熊本地震の 1 ヶ月後に熊本でそれが予定されていて、メンバーも会場も被災してキャンセルとなった。それでもみなさんの無事を確かめたく、予定通り押しかけて、4 人の婦人相談員が集まってくれた。被災状況はそれぞれだったが、「緊急時の相談をどうしたらいいのか。過去の記録などあれこれ探したが、何も情報がなく困った。必死の思いでやってきた。自分たちの経験を振り返って、記録を残し、次の災害に役立てたい」との声があがった。感動した。「自分たちの経験を振り返ることから学びを深め、これからに活かす」というのが、十年続けてきた研修の趣旨でもあったから。

あれよあれよという間に、3 ヶ月後に熊本の婦人相談員を集めての振り返り研修とフォローアップのアンケート、半年後、全国婦人相談員連絡協議会でこれを報告した。そこで、ハンドブックを作ろうとなって、編集委員会が結成され、神戸や東北の時の声も拾えたものを加え、1 年後には本当にできてしまった。2017 年秋の全国大会では、このハンドブックが配布され、「次は、これを使った研修をやります」と言う。

あっけにとられているうちに、3 月名古屋、6 月神戸と岡山、7 月は福井と秋田、この後、熊本、静岡、鹿児島が決まっている。本当に素晴らしい。実は、この研修をすると、早速その近辺で本番があって実践編となるというあまりありがたくないジレンマまでできてしまったのだけど。いずれにしても、日常と緊急時は両輪のようにあって、日常の力が高まれば緊急時の力も高まるし、緊急時の力が高まれば日常の力も高まるものだ。



むつ

<2015年8月27日むつへ>

例年の夏休みフィールドワークとして、飯館、南相馬、福島を訪問後、岩手を抜けて青森へ。途中で小岩井農場に立ち寄ったが、「希望の牧場」と比べ、複雑な気持ちになる。三沢を抜け、六ヶ所村を通り、原子力施設やPRセンターの看板をやり過ごし、なんとなく重苦しい気分を抱えたまま、むつへ。

プロジェクトも、はや5年目を迎え、十年の折り返し地点。打ち合わせと懇親会で、懐かしいお顔に新たなお顔も見え、いつも変わらず暖かく迎えてくださる皆さんの笑顔に救われるような気がする。今年は院生のむつ参加率が高く、総勢12名。



<8月28日支援者支援セミナー>

支援者支援セミナーはむつ市役所で。むつ市職員をはじめ、青森県職員、施設職員、弁護士、民生・児童委員、海上自衛隊職員など計73名が参加し、12グループが編成された。

簡単な自己紹介の後、せっかくなので福島でのフィールドワークのことを少し話したいと、「元気アップつちゆ」を立ち上げ、再生エネルギーで地域の復興再生に取り組んでいる加藤勝一さんの話を紹介する。「自分たちの街は自分たちで再生させる」と地域の未来を考える人たち。ここでも、一緒に地域のよりよい家族支援について学び合えたらと導入する。





地元の支援者から、障がい者の自立支援に関わる事例と虐待通告の事例。昨年よりさらに一歩進め、事例提供をしてくださった現地の支援者の協力を得ながらセミナーを進行することができた。毎回、参加者の対象地域を変えているため、新規の参加者も多いが、継続参加者も年々増えている。ワークショップ方式の研修にも慣れてきたのか、スムーズに議論を進めることができるようになってきたことを感じる。最初の頃は参加型のセミナーに戸惑いが大きかったものだ。こうなってくると、せっかくの議論を深めるために、もう少し時間が欲しいところだ。

グループが多いと、個別のグループの中でどんなことが話されたのか全部を把握することはできないが、アンケートを見ると、グループの力によって、私たちが伝えなかったことがしっかりと届いている手応えを感じる。一部を紹介。

・地域の取り組みにつながっていけばいいなと思いました。問題は上部だけでとらえるのではなく根本になるものを見つけることだと感じた。枝葉にとらわれず太い幹を支援していきたい。(50代男性)

・事例検討で、グループごとに話をしている中でいろいろな視点があり、私自身考えが固着していたところもあり、視野が少し広がったように感じます。ありがとうございました。(50代男性)

・はじめは不安いっぱいでしたが、いろいろな方々と話す中で妄想がたくましくなったような気がします。勉強になりました。ありがとうございました。(年齢・性別未記載)

・様々な事例へ直接かかわっていると、問題点やリスクの方に注目がいきます。視点をかえてみると、またちがった見方ができること、いい面(家族がもっている力)をひきだしていくことを大事にしたいと改めて思いました。ありがとうございました。(40代女性)

・時間が短い。(60代女性)

・2つの事例の学習をして、私の周りに居るかもしれないし、気づいていかなければならないと思いました。地域の中で楽しくよりよい関係を作り、住み心地のよい地域にしたいと思いました。(70代女性)

・いろんな意見や感想、考え方を知る事ができ、とても良かった。ぜひ次も参加したいと思った。(60代女性)

・色々な機関の方とお話しできる場で、色々な見方、意見を聞くことができ、勉強になりました。ここでの出会いをきっかけに、今後の業務でつながっていけることが出来たら良いと思います。(30代女性)

・客観的事実だけではなく、推測すること、想像

することが、新たな事実の発見につながると思いました。大変勉強になりました。ありがとうございました。(40代男性)

・今日はいろいろな関係機関の人たちと協議ができたことがとてもよかったと思います。様々な立場からの声が直接きけたことで、考えの幅が広がったように感じます。視点を変えることの大切さが印象に残りました。来年度も参加したいと思います。(40代男性)

院生たちのレポートからも、グループ内での協働の様子がうかがわれ、院生たちにとっては、地域の力を実感する貴重な機会だったようだ。多職種連携や力に焦点を当てた援助視点が、むつの支援者の日常業務に反映されていけばよいと思う。

<8月28日夜のフィールドワーク>

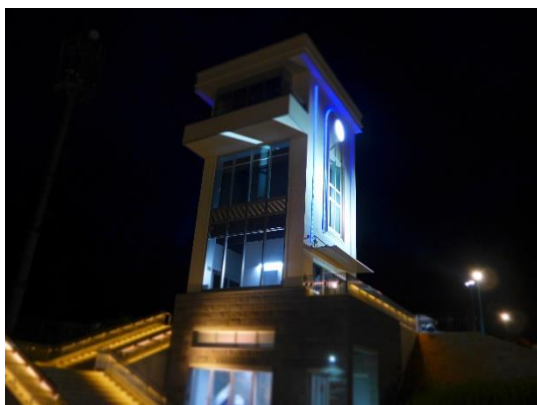
終了後、図書館でやっている漫画展会場に行き、お父さん応援セミナーを開催する公民館へ。



セミナーは男性のみ参加可なので、女性陣は夜のフィールドワークに案内してもらおう。杉浦さんのキャンピングカーに乗せてもらって暗闇を走る。ちょっとした冒険気分。

まずは、この春オープンしたばかりという海望館へ。15mの高さにある塔から大湊湾や市街地を一望できる。ちょうど満月で、月の光が海面に落ち何ともロマンチックな光景だった。一番美しい海岸は米軍基地が置かれていて、アクセスできないそうだ。

そういえば、どの地でもそうだなと思う。
その後、安渡館でティータイム。真っ暗闇
で日本最古のアーチ式ダムを見学し、毎年
恒例の大湊「美味小屋蜜」で男性スタッフ
たちと合流し、名物アラン・ドロンを食べ
ながら、スタッフ交流。



<8月29日漫画展と漫画トーク>

漫画展と漫画トーク。感想ノートやアンケートを見ると、今年は珍しく中学生たちの書き込みが目立った。夏休みということもあって、毎年、この図書館では思春期の子たちがたむろしている風景に出会うが、とくにいじめをテーマにした漫画に反応したようだ。一部を紹介する。

・とても共感できました。また、とても感動したものがとくに最初の漫画です。お父さんのことをみんなが思っていたことを知ったお父さんは、とてもうれしかったと思います。次回のプロジェクトもたのしみにしています！（中学生女性）

・本当にとても良かったです！！少しですが泣いてしまいました。少しでもこのようなことがないようにいっていますよ！このようなことをして下さりありがとうございました。（中学生女性）

・ひとつめの物語を読んだことで、家族がきちんと言いたいことを言わなければいけないことが分かりました。心配していることも言わないと分からないので、思ったらすぐに口に出すようにしよ

うと思いました。いじめについても取り上げてかいていて、いじめられる側にも問題があるとは決していいきれないけど、思っていることはきちんといわないと解決できないから、いったほうがいいと思いました。(中学生女性)

・このきかく最高ですね！とてもいいと思います！これからもファイトです！（中学生女性）

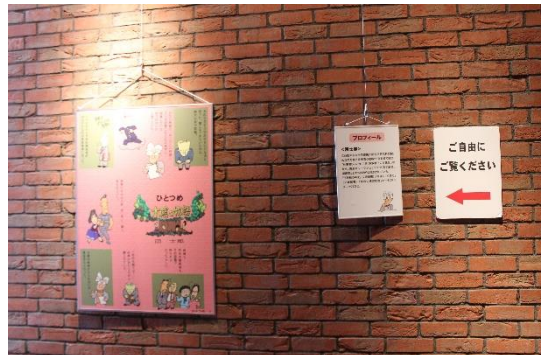
・日じょう的な感じで良かった。(小学生以下女性)

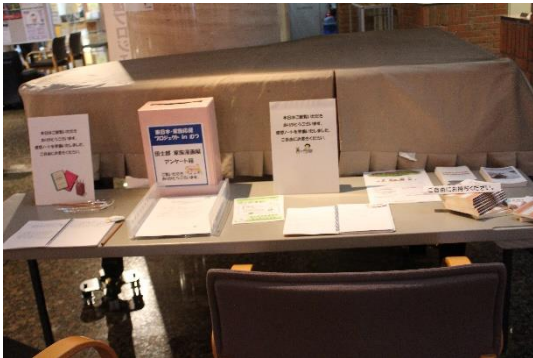
・絵がすごかったです。日常的な風景でした。(小学生以下女性)

なかには若者からのこんなメッセージがあり、感銘を受ける。

・若い身として、見ておいてよかったと思う。心境や思想に格別の変化があったわけではない。むしろ展示されていた漫画は問題を提示しつつも「だからこうだ」と明確な答えを出しているわけではなく、与えられるのは形容しがたい胸中の違和感だけ、だがだからこそ、はっきりとした答えがなかったからこそ僕には興味があつた。もし答えを与えられれば、恥ずかしながら未熟な僕は安易にそれを受け止め納得していたと思う。しかし、今回与えられた、というより求められたのは自分自身の思考。何より大事な自分で考える機会を得られたことに感謝したいと思う。またごく幼稚な感想ながら、絵がついていたのでわかりやすくよかった。文も短くまとめられてあり見やすかった。団氏にはこれからもお疲れの出ないようにと願う。(男 19 歳)

こんな風に反応してもらえると、私たちのモチベーションも上がる。





▲▼むつ市長



昨年引き続き、むつの宮下市長も顔を出してくれ、ご縁の拡がりの面白さについて語り合った。実は、この3月にN Yで漫画展をしたさい、中村さんと私がセミナー講師をした在米領事館はむつ市長の元職場であり、元同僚たちとご一緒したのだった。一貫したコンセプトで長く仕事を続けていると、偶然のように見えて実は必然ということがあり、いろんなことがつながり拡がっていく。

反省会では、毎年楽しみにしていること、「2020年までとお話がありましたが、その後なくなるのであればさみしいです」という声も聞こえ始め、これから、「あと何年」と逆算していくことになるのだと改めて思う。この取り組みが十年後も何らかの形で地域につながりと拡がりをもたらし続けてくれるものとして着地して欲しいものだ。

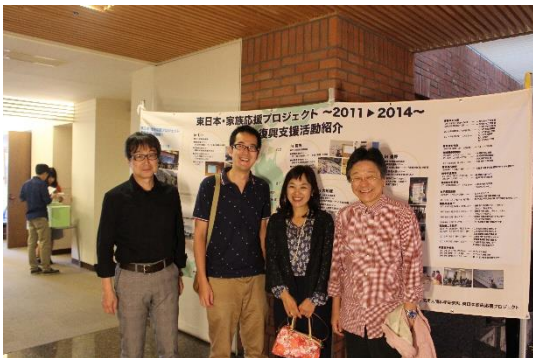




▲スタッフ一同記念撮影



▲反省会



▲駆け付けてくれた元スタッフと

多賀城

<9月11日支援者支援交流会>

今回は、前日から明け方にかけて、大雨が関東・東北を襲い、あちこちで警報が出されている状態だった。私自身は一足先に車で出ていたが、仙石線が運休で、院生たちの足が心配だった。東北本線の運行を待ち、国府多賀城経由で少し遅れて到着すると連絡が入る。さすが我が院生たち！この日は、それまでの大雨が嘘のような秋晴れとなった。

いつものように、この夜は支援者交流会。1年ぶりにお会いした図書館スタッフの皆さんが再会をとても喜んでくださり、十年プロジェクトであることへの感謝の言葉を何度も頂いた。来年からは図書館運営の体制が変わり、図書館自体も新しい場所、新しい建物になる。スタッフも変わることから、交流会では、これまでの経過を懐かしく振り返り、いつもより親密さを感じるものとなった。

丸山館長が院生たちに、「被災体験を伝えよう」と体験談を語ってくださったことも印象的だった。多賀城は10mもの高い波が一気に来たというわけではなく、徐々に水位が高くなっていったそうだ。館長は丘の上に逃げたが、水が防波堤を越え、「これは危ない」と思った。波の高さが2.3mまで来て、自宅が波に飲まれた。タンクローリーが家にぶつかり、車も流されてしまった。丘の上以外すべて水に飲まれ、家が流されていた。まるで映画の中のように、現実だと思えなかった。水が引くと自衛隊が救助に駆け付け、小野屋ホテルに避難した。外灯もな

く夜は真っ暗、とても寒くて、赤十字の毛布を5枚着ても寒かった。そんななか、外が明るくなったと思ったら、小野屋ホテル近くの石油タンクがいきなり炎上した。石油タンクの炎は上へと上がるもので心配いらないが、近くのガスタンクに引火すれば爆発し危険ということで、文化センターへ二次避難。避難所では公務員として市民を守たなければならないので、仕事をしていた。2週間お風呂に入れず、石油などオイル漏れのせいで家の壁は真っ黒になっていた。

館長は、冬に起きた地震でまだよかった、夏だったらさらに悲惨な状況に陥ったのではないかとおっしゃっていた。冬だから支援物資を腐らさずにすんだし、寒さはたくさん着ることで何とか調整することができた。これを参考に、季節のことも考慮して今後の地震対策を考えることが必要だ。このような災害は経験しない方がいいけれど、経験したからこそ、周りの人たちの励ましを多く受け、少しずつ立ち直っていくことができ、人の力の大切さを実感することができたということだった。

津波で流された館長の車の中には、館長の手作り紙芝居が入っていたが、震災後しばらくして車が発見され、車の中から紙芝居が出てきた。紙で包まれていただけだったが、紙芝居は奇跡的に水に濡れずに残っていた。というわけで、これを「奇跡の紙芝居」と呼び、明日のプログラムで披露して頂けるといふ。私たちの期待も一気に高まった。



<9月12日お父さん応援セミナー>



第1部は図書館主宰で、ボイストレーナー&パフォーマー荒井真澄さんを講師に、「お父さん応援セミナー～絵本 DE ヴォイスパフォーマンス」が開催された。多賀城にもイクメンを育てたいという図書館スタッフの思いに関わらず、お父さんの申し込み者が少ないということだった。都会でも最初のうちはそうだったなと過去の仕事を懐かしく思い出す。

男性の先生方を含め 15 名が参加。女性陣はお手伝いの形で参加したが、女性たちがイクメンパパを見守り応援するという構造がうまく作り出されていた。



ボイストレーナーによる指導を見るのは初めてだったが、姿勢、呼吸法、体を動かしながら発声を促すなど、日頃から気になっていた発声と体のあり方についてなるほどと考えさせられることが多かった。

エアテニスをしながら「おはよう」と言い合う「おはようテニス」では、最初恥ずかしそうにしていた人たちも、最後には楽しみながら声を出せるようになっていった。

それから、姿勢や目線、発声の方向など絵本読み聞かせのコツを教え、最後には「あたりまえのこと」という詩の輪読がパフォーマンスされた。これは震災で作られたものなのだろうか。何とも心に染み入る詩で、男性たちがひとりずつ交代に一行ずつぎこちなく読み上げる声は何とも味わい深く、感動的だった。



あたりまえのこと 矢野竜広

太陽が昇ること
自分の歩幅で 歩けること
ギターを好きなように弾けること
時間を 共に過ごせる友達がいること
思いっきり ボールを蹴り飛ばせること
電車に乗れること
自分の目で ものが見えること
信号を渡れること
まわりに 笑顔があること
目を閉じれば 好きな場所に行けること
寂しいと 感じられること
いろんな人が 世界にいること
家族と一緒に 食事をとれること
明日になれば 明日がくること
空がずっと 消えないこと
トイレに 紙があること
自分の話を聞いてくれる人がいること
店に行けば ものが食べられること
書いたものを 消しゴムで消せること
深呼吸できること
時間が 死ぬまでは残されていること
階段を登れること
花の香りをふと感じられること
波の音が 耳に入ること
何もかも忘れて 笑えること
歯磨きが できること
ぼんやりと 考えたり出来ること
太陽が沈み 月が見えること
当たり前のことなんて
何ひとつない
当たり前に思えてしまうこと
そのひとつひとつが
本当は 奇跡

＜家族応援お話会＞

第2部は、「家族応援お話会」として、多賀城民話の会、丸山館長の奇跡の紙芝居、読み聞かせボランティア「カンガルー読書会」によるお話会ペープサートと盛沢山のプログラムだった。濃縮された企画に少し心配もあったが、乳幼児からお年寄りまで多世代で多様な地域の人々の交流の場となり、部屋が多賀城の人々の温かさでいっぱいになった。



丸山館長の奇跡の紙芝居は、「パンダはなぜかわいいのか」と題する手作り紙芝居。前夜、背景にあるお話を聴かせて頂いたこともあり、紙芝居を読んでもくださる館長の暖かい笑顔のむこうにあるたくさんの想いを頂いたような気がする。

なるべく地域の方々の力を中心に、私たちはお手伝いさせて頂く形の企画ができたらと願ってきたので、今回、地域の方々のコラボで企画が実現できたことは本当に嬉しいことだった。

この後、多賀城民話の会の方々とおおぞら保育園との交流も実現したそう。プロジェクトをきっかけに地域の力が活性化するとしたら、こんなに喜ばしいことはない。

＜漫画展と漫画トーク＞

漫画トークは地元の方と支援者で席が埋まり、リピーターもいた。漫画展の感想にも、「毎年ありがとうございます」「今年も楽しみにしてきました」「来年も楽しみにしています」など、短いながら継続的な取り組みが認知されていることがうかがわれる。

「来談者の手にする幸運に同席する。とても素敵な場面だなあとと思います。分からない未来にむけて一歩踏み出しているという言葉に勇気を頂き、明日からまた楽しんで生きて行きたいと思いました。」という感想のほか、「すごくいい話だと思いました。これほどいい応援はないと思った。(小2男子)」という声もあって、何かがきちんと届いているんだと感じることができた。

来年、この図書館に大きな変化があるが、

時間経過による社会変化とともに、このプロジェクトもある。変化は、十年続けることがもたらす必然とも言えるだろう。復興とはそういうものだ。

次年度から開催を引き継いでくれることになっている C.C.C.のスタッフの方々との交流、意見交換も活発に行われた。寂しい思いもあるが、生まれ変わる多賀城図書館が地域の人々が集える良い場所になるといい。また来年を楽しみに。



◀末の松山



宮古

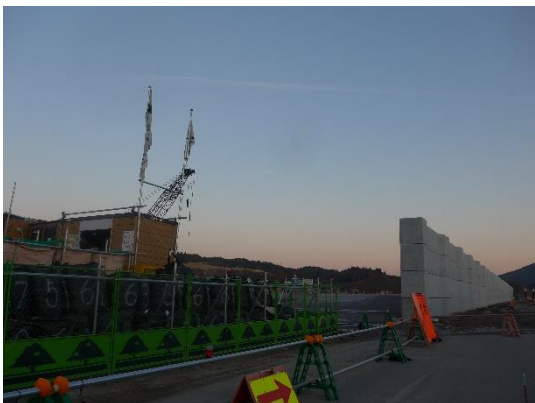
<11月5日気仙沼へ>

一日早く前乗りして、公共交通機関を使って沿岸部を旅してみることにした。ずっと、三陸鉄道に乗って、沿岸部を回ってみたいと思っていたのだ。新大阪を7:50 発に乗って、東京、一関を経由、JR 大船渡線で気仙沼 14:09 着。まずは、タクシーで気になっていたリアスアーク美術館へ。このあたりも平地で水が来たそうだ。運転手さんの家は大丈夫だったが、被災した知り合いも多いとのこと。防波堤についてさりげなく話題にすると、自分らは海を見て育ってきたし、海を見て判断するから、本当は嫌なんだけど、上が決めることだから仕方ないとあきらめ口調で言っていた。



リアスアークの展示は、かなり個性的でおもしろかった。展示の意図が明確で、被災者の立場から、自分たちのことは自分たちで主体的に考え実行すべしというメッセージにあふれている。リアスに津波はつきもので、それを含めた津波文化を伝承すること。2006 年に昭和の大津波展をやったが（リアルな絵画）、住民の1%も来ず、震災を迎えてしまった。「がれき」「未曾有」という言葉の使い方はどうなのかとの問題提起が印象に残る。

足がないので、タクシーを呼んで気仙沼港へ。2 千円強。復興の状況が気になって来たのだと言うと、運転手さんがいろいろ説明してくれる。元は水産業に勤めていたが、被災して、小さな個人の会社だったため再建できず、解雇となったそうだ。それでタクシーに乗るようになった。魚市場も地盤沈下で、かさあげして床が高くなっている。この運転手さんは、みな防波堤に賛成ではないが、いつのまにか決まってしまうと言う。

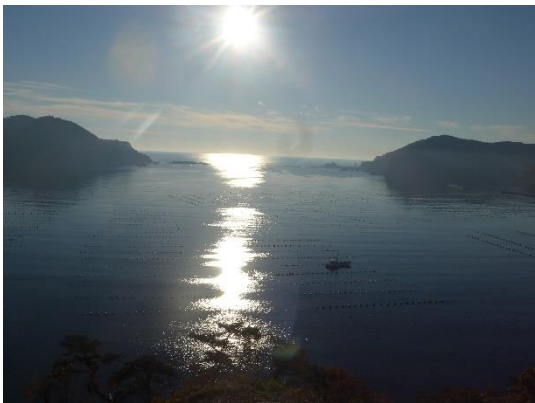




東北は暗くなるのが早く心細いので、早々にタクシーで引き上げ、駅で BRT を待つ。BRT とは震災で運休となった JR 線のバスサービスで、気仙沼と盛をつなぐ大船渡線の線路敷をバスが走る。途中一般道を走る部分もあるが、線路内を走っている時には、自分の乗るバスが遮断機の中にいる格好で、時々混乱する。

途中、「奇跡の一本松」という駅もあった。線路を埋めたコンクリートの専用道路と一般道路の両方を通る。「高田高校」からはたくさんの高校生たちが乗ってくる。とくに被災の影響を感じさせない。10分ほど遅れて7時半前に到着。バスの終点は盛駅の1番ホーム。

その夜は、新しくできた大船渡温泉に 1
泊した。露天風呂から流れ星を見た。



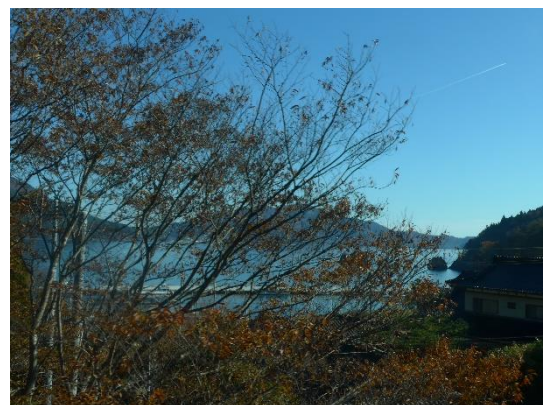
<11月6日三陸鉄道に乗って>

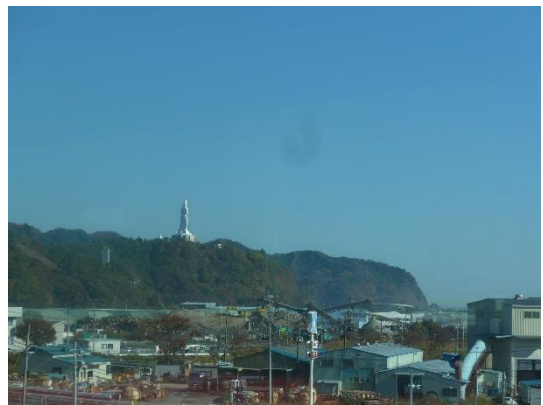
8時半にタクシーを呼び、大船渡から三陸鉄道リアス線で釜石まで。9:13 発 10:05 着。ずっと海沿いを走る。秋の紅葉日和で海も青く美しい。





釜石まで9つの駅があって1時間弱の行程。お天気も良く、車窓から青い空と海が交じり合う美しい風景を眺めることができる。駅ごとの個性的なしつらいがまた楽しい。恋し浜駅には、ホタテの貝殻でできた絵馬が待合室の窓にびっしりと飾ってあるし、三陸駅には干し柿が暖簾のようにつるされている。平田駅から大観音を臨むともう終点の釜石だ。





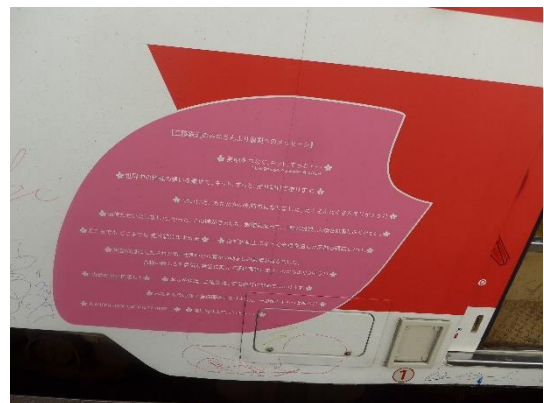


それにしても、どこもかしこも防潮堤の工事中。釜石・宮古間をつなぐ JR 山田線は復旧のめどが立たず、バスを乗り継いで宮古まで行くことになる。釜石を 10:36 発のバスに乗り、山田に 11:24 着。さらにバスを乗り継ぎ、山田を 11:45 発で宮古に 12:45 着。遠い道のりだ。

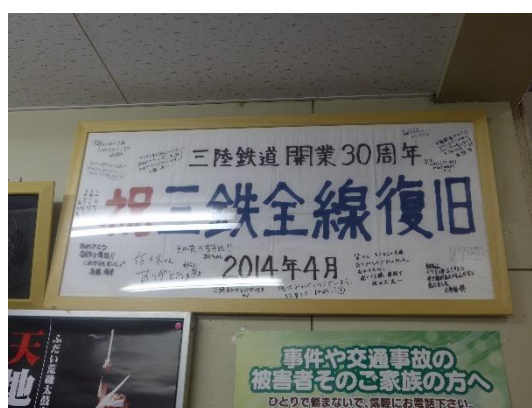




宿となる熊安前でバスを降りて荷物を預け、そのまま三陸鉄道宮古駅へ。ラッピング列車になっていて、サクラの花びらには、たくさんのメッセージが書かれている。







宮古からはまた三陸鉄道の北リアス線が走っているので、終点の久慈まで乗ってみる。13:15 の北リアス線に乗り、終点の久慈に 14:50 着。途中、16 駅あって、こちらは 1 時間半ほど。2 両編成の小さな列車だが、あまちゃんブームでにぎわっていた。

久慈をぶらぶらして、16:05 発に乗り、宮古に 17:45 着で戻ってくる。

赤や黄色に色づいた山々と輝く海の美しさに始終ワクワクしながらも、実は、南から北まで海沿いに延々と防潮堤の工事が始まっていることが気にかかっている。これからはこんなふうに海がブロックされていくのだろうか。宮古でも、湾岸道路の周辺は大規模改修工事が進み、新たな防潮堤の長大な壁が築かれつつあった。昨年、一昨年の光景との違いに戸惑いを隠せない。

チェックインをすませ、打ち合わせ会場であるよし寿司へ。

<11月7日宮古でのプロジェクト>

岩手では5年目だが、宮古での開催は3年目である。8:45にピックアップしてもらい、今年で開催場所である「シートピアなあと」へ向かう。会場設営と打ち合わせ。

漫画展の看板には昨年作成したペイントアートのシートとプログラム紹介をうまくディスプレイしてくれている。1階ロビーには、立命館大学理工学部の協力のもと地元住民が構想案を出し合って作成した「なあと」周辺の鉾ヶ崎地区未来予想ジオラマが展示されていた。



「なあと」での開催は、以前より検討していたが、なかなか会場の日程が合わず、今年初めての試みとなった。漫画展にはこれまでより立ち寄って足を留めてくださる方が多く、プログラムの方にも昨年より多くの方々にご参加頂けたように思う。

午前の漫画トークには 20 名ほど入り、開会の挨拶時、昨年も見かけた方、最初の挨拶時に涙ぐんでおられる方など数名のお顔が眼に入る。それぞれにいろいろな思いがあって来てくださっているのだろう。



「語り継ぎたい宮古の伝承」では、NPO法人かわい元気社事務局長の横道廣吉さんが、宮古に伝わる「義経北行伝説」について語ってくれた。義経は平泉で自刃したとされているが、宮古においては、亡くなったのは義経の家来であり、義経は逃げ延びて東北を渡り歩いたとされている。その伝説に関わる神社や物が今なお多数残っているそうだ。義経伝説に興味があってプログラムに参加したという地元の女性2人組がいて、興味深かった。



若竹会の企画「アートで遊ぼう」は、いつもながら若竹会の皆さんのクリエイティブなアイディアに感心するばかりである。漫画展の背景に昨年の「アートで遊ぼう」で製作したシーツ絵をさりげなく使ってくれているかと思えば、今年の製作は浄土ヶ浜の立体図で、福祉祭りでの展示を予定してくださっているとのことだ。

やりっぱなしにせず、次につなげていく発想に学びたいと思う。若竹会のスタッフや利用者みなさんとの再会、アートの協働が嬉しい。





また、今年は勉強熱心な若竹会のみなさんからの強い要望があり、宮古でも「支援者支援セミナー」を実施した。立命館チームも入れて参加者15名。

ホワイトボードに事例の概要を書いたうえで、おおざっぱに今日の流れと趣旨の説明、事例提供者の問題提起。

地元の方が提供してくれた事例は、障害のある成人男性と高齢の父親二人が、被災して自宅を失くし、避難所、仮設住宅、復興住宅と点々とするなかで、さまざまな問題行動が現れ、地域が困っているというものだった。

さまざまな条件を考慮した結果、リフレクティング・プロセスを使った事例検討をすることにする。「A支援者チーム」と「B支援者支援チーム」に分け、まず

は、Aチームで話を明確化する。30分ほど話したところでBチームへ。必ず、皆一度は発言するようにして40分。再度、Aチームに戻り、あらためて思ったことの共有15分。

最終的に、被支援者の問題というより、災害後の宮古のコミュニティをどのように再建するかという問題だということが確認された。土地や企画者の個性を十二分に感じ、私たちにとっても学びが大きかった。

「今回の事例検討会では地域をこえて、様々な方と話し合え、いい機会だった、支援者だけで留まらず、地域住民を巻き込んだ話し合いもやってみたい。(30代男性)」 「直接の支援者と一歩離れた視点で意見の違いなど見ることができとても勉強になりました。(40代女性)」 「自分のものさしで考えることなく、視野を広げてみるのが大切だと思いました。(40代男性)」 など、生活経験や支援経験が異なる者たちが集まり、多様な視点で議論することの意義がアンケートにも反映されていた。



夜の支援者交流会では、今後のネットワークや来年に向けての積極的な反応が返される。十年後も積み重ねてきたものが地域の力として続いていくように、私たちはきっかけで、現地の力を中心にプログラムを運営することができるようにと願ってきたこともあり、だんだんとそんな形になってきたことを嬉しく思う。



<11月8日田老フィールドワーク>

朝 10 時、皆でジャンボタクシーに乗り込み、宮古市田老地区へ。今年も宮古市観光協会「学ぶ防災」ツアーに参加した。

去年は駐車場だった土地がグラウンドになり、丘には復興支援住宅が建ち、震災以前にあったものより 4m も高い防潮堤が造られている最中だった。

去年のガイドさんの顔も見かけたが、今年のガイドさんは女性で、自宅が被災し、義母が流されたという方だった。

浜にはわかめ小屋が並んでいるが、漁師の家は子どもからお年寄りまで仕事を分担する家内工業である。義父は漁師で、戦争と昭和の津波を体験していた。お酒が入るといつもその話をしていたが、自分は

「また始まった」という感じで聞いていた。今はそれを後悔しており、たとえ自分自身がみんなから煙たがられても、うるさく伝える役を引き受けようと思っている。

ご自身は浄土ヶ浜のボート観光で働いていて、あの時、ボート観光が始まる少し前、団体の観光が入り、船を出して戻ってきたところだった。船のエンジンが温まっていたので、船長は沖へ出ることを決意し、3 日間、沖で過ごしたそう。その間、カモメの餌を食べてしのいだという。

津波のなか一人で沖に出る船乗りの話は何度か耳にしたが、思い浮かべるだけで、恐ろしく壮絶な光景だ。

津波でんでこで、自分も高台へ逃げた。でんでこは、子孫を絶やさないため、家族の絆を信じてそれぞれ逃げるということ。戻った人たちは流された。自宅は浄土ヶ浜の近くにあり、義母が流された。あの時戻っていたらと思うこともあったが、夫とその話題はできない。でも、今は、逃げて良かったと思うことにしている。その分、防災を訴え続ける覚悟だ。

義父は漁師だったが、船を失い、仮設に入ってテレビ（朝の暴れん坊将軍や夕方の水戸黄門など）を見るだけの生活になってしまった。これではと、夫と相談して家を買うことにしたが、新しい家に移る前に、心臓病で亡くなってしまった。2011 年暮れのことである。宮古には医者がおらず、救急所で盛岡まで運ばれたが、手遅れだった。仮設から出るのも微妙である。あいさつをしたり、「また遊びに来てね」とも言いにくい。互いに心情はわかっている。

第一防潮堤に並べられていた石は墓石だったことが、工事中、古文書からわかつ

たそうだ。今は一部が残っている。逃げて
いる最中に交差点で衝突しないよう道の
角が直角でないことなど、津波の被害に遭
ってから気づいたことがたくさんあった。
このガイドさんは、防潮堤に賛成だった。
最善の防災をすべき、気を緩めてはいけな
い。切迫した思いがビンビン伝わってくる。

高さ 10 メートルの防潮堤から周囲を眺
めた後、津波水位 17.3 メートルの表示があ
る製氷施設を見る。たろう観光ホテルは工
事中で、5 階までの非常階段を設置してい
るところだった。ガイドとしてのこれまでの
経験から、まんなかにエレベーターを設
置してほしいと訴えている。高齢者には 5
階まで階段を上るのは無理だし、雪の日な
どですべて落ちたら危険。宮古市に要望
書を出し続けているが、自分たちの声はな
かなか届かないという。

最後に、集会所で、「たろう観光ホテル」
社長が撮影した津波のビデオを観た。去年
も同じものを観たはずなのに、衝撃が大き
すぎたのだろう。初めて観るように感じる
場面もあった。この場所に来て、ちゃんと
説明を聞きながら観てもらいたいという
理由で、このビデオはマスメディアに公開
されていないというのにも頷ける。防潮堤
の内側には野球場が建設中だった。





昨年と同じコースだが、それから大槌に向かい、福幸きりり商店街で昼食をとる。2011年12月に大槌北小学校の校庭にオープンしたプレハブの仮設店舗。それから、城山公園に上り、町の様子を眺める。かつては大槌の町を一望できたのだろうが、現在は、相変わらず空虚な状態のままある。



今年は空港に戻る前に、急遽、遠野の古民家に立ち寄ることにし、見学させてもらう。遠野物語や民話の語りをやっている大平悦子さんのご自宅だ。私は昨年泊まらせて頂き、語りも聞かせて頂いた。今回は急だったため、大平さん自身はお留守で、家守をしているお連れ合いさんが出迎えてくださった。

なんだか懐かしい感じがする古民家と

古道具、いろりや吊るし柿など、昔話の中に入り込んだ錯覚を覚えたひと時だった。



つづ

